

談 話 室

第35回日本眼科学会専門医認定試験・第2回日本専門医機構眼科専門医認定試験を終えて

1. 2022年に始まった専門医試験の大きな変化

日本専門医機構がすべての専門医を統括する制度が始まり、上記タイトルのように、2023年の試験は第35回日本眼科学会専門医認定試験ですが、同時に第2回日本専門医機構眼科専門医認定試験とも呼称されます。なお、この新制度で2018年以降に眼科研修を開始し、日本専門医機構の専攻医登録をした受験者は、最後に日本専門医機構の認定を受けるというシステム以外は、原則従来どおりですので、専門医試験を最近受験された先輩方のアドバイスの多くは、そのまま聞いていただいて問題ありません。ただし、受験者にとっては重大な変更点が数点あります。今年の専門医試験が終わった後で聞いた話なのですが、この談話室には非常に多くの熱狂的な若い読者、つまり、専門医試験受験予定者がいらっしゃるそうです。そこで、今年で専門医制度試験委員会委員長の任期を終えるにあたり、私が皆さんに伝えたいことを、少し明確過ぎるかもしれない文章で記載させていただきます。やや格調が低くなることお許しください。

2. 受験制限は5回ではありません。眼科研修修了日から5年間です

以下の表現は100%正確ではなく、多くのご批判をいただくのですが、もう一度記載させていただきます。是非ご記憶ください。「研修修了後、専門医試験は合格できないと、5年で実質的に永久追放になります。」ここで大切なのは、5回までは受験資格が保証されるわけではないということです。先輩の言う「俺はもう10年以上かな、何回でも受けられるんだよ」、という言葉も信じないでください。2022年から変更になっています。

3. 受験資格喪失までのカウントダウンは、初回の受験から始まるわけではありません

2022年度に眼科入局後の4年間の研修を修了した方（受験願書を提出し資格認定委員会で研修修了が認められた方）は特に気をつけていただきたいのですが、たとえどうしようもない理由で欠席して、たとえ1回も受験されていなくても、**2026年で専門医試験の受験資格を失います**。2022年度に日本専門医機構の専攻医マイページで研修修了の申請をされた方は、たとえ出産・育児などの正当な理由があり、この2年間専

門医試験を受けていない場合でも、後述する必要な手続きをしなければ、来年以降の3回しか受験のチャンスは残っていません。2回のチャンスを失ったことになります。もし、向こう3年の3回の受験チャンスで合格しなければ、**受験資格を得るにはもう一度どこかの基幹施設で4年間の研修をし直す必要が生じます**。非現実的ですし、自分が研修したい場所でもう一度研修を受けられる可能性は低いと予想されます。これは全科共通の日本専門医機構マターなので、残念ながら日本眼科学会に救済措置を設ける権利はありません。そして、今のところ救済措置を作ろうという日本専門医機構の動きもみられません。ご自分で対応いただく必要があります。

すでに、研修修了手続きを終えられていて、出産・育児、留学、病気などの正当な理由をお持ちの方には、申請を行い、日本眼科学会と日本専門医機構の承認を得て、受験の有効期限を1年単位で延長する方法があります。申し訳ありませんが、制度が複雑で個々の受験者で条件が異なります。また、この方法が、すべての受験者にお役に立つとは限りません。

2年の初期臨床研修後に、日本専門医機構が統括する後期研修プログラムを履修した若き眼科医たち（専攻医；旧制度では後期研修医と呼ばれていた）が、規定の4年の研修を修了し、専門医試験を受験します。もう一度書かせてください。**専門医試験の受験資格を失うまでの5年のカウントダウンは、皆様方が「4年間の研修を完了した」という、日本専門医機構の専攻医マイページで研修修了の申請をした修了日から始まっています**。例えば、研修修了後、1年受験を見合わせて勉強して、次の年から5年間受けるといったことが許される柔軟性のある制度ではありません。これは司法試験等の国家資格を模した制度らしいのですが、**5回の受験が保証されるわけではなく、5年以内に合格することが求められています**。5回受験できるという誤解はきわめて多く、説明すると皆様、私と日本眼科学会の専門医制度に対して怒りをぶつけられるのですが、日本専門医機構で全科的に決まっていることなので、日本眼科学会にはこれを修正することができません。申し訳ありません。

4. 旧制度(4年もしくは5年の研修を修了)で専門医試験の受験資格を得た方も、あと4年で受験資格を失います

旧制度で4年もしくは5年の研修をすでに修了している方は、**2023年に一律に5年間の猶予のカウントダウンが始まっています**。来年を含めてあと4年で専門医試験に合格しなければ、もう一度、どこかの基幹施設で4年もしくは5年の研修をやり直す必要が生じます。あまり猶予がありません。今後、眼科専門医資格の取得をどうするか最終決断が迫られています。私個人としては、可能でしたら、取得されることを、心からお勧めいたします。外来で患者さんへの説明でよく使う表現ですが、私の子どもが皆さんの立場でしたら、そうするように強く勧めます。

5. 最近3年間の受験者数と合格率(表1)

制度の劇的変更前の最後の年である2021年の専門医試験の合格率は66.9%，受験者数が341名で113名が不合格でした。また、341名の受験者のうち再受験者は59名でその合格率が23.7%ですから、45名の再受験者が不合格でした。この割合で翌年から再受験者が増えていくと、2026年(旧制度の再受験者は2027年)に受験資格を失う受験者の数が非常に大きくなる

表 1 最近3年間の受験者数

回	年	受験者数	総合合格率
35(2)回	2023	345名	94.5%
34(1)回	2022	392名	90.6%
33	2021	341名	66.9%

リスクを危惧しました。そして、前述のように、2026年までに救済措置の設定は期待できない状況です。専門医資格の目的や意味を再認識し、問題作成において吟味に吟味を重ねた結果、結果的に合格率が高くなりました(図1)。

6. 合格率を上げるには

合格率を上げるには、合格最低点を下げればよいのですが、ここで立ち上がったのが、大学生の頃から我々に染みついている、どんな形であれ60点取れば合格、という伝統です。「合格点を60点より下げる」という私の提案は、慎重に審議された結果、専門医制度委員会で否決されました。

対策として、試験委員会は、**良問を作る**という王道を目指すことにしました。試験問題は多くの各専門分野の出題委員にお願いして作成され、これを実際に会議室で、試験委員会で一問ずつ解いて問題の修正と出題の採否を行います。出題者の先生の解説に基づき、試験委員全員で出題に適した問題かどうかを討論します。従来は、「専門医試験のレベルを超えているのではありませんか」とご意見を申し上げても、その分野の権威である委員が「常識です」とおっしゃると、それで出題が決まっていました。幸い私は年齢を重ねて、ここで、もう一度、専門外の試験委員全員が納得してその問題を解けるレベルまで、修正をお願いすることが許される立場となりました。さらに、特筆すべきは、次期委員長を務めてくださる小幡博人副委員長(当時)が、委員会後に全問をご自分で解いて、難しすぎると考えられる問題は、委員会の後でも、出題者に連絡を取って、修正を重ねてくださり、次の委員会で

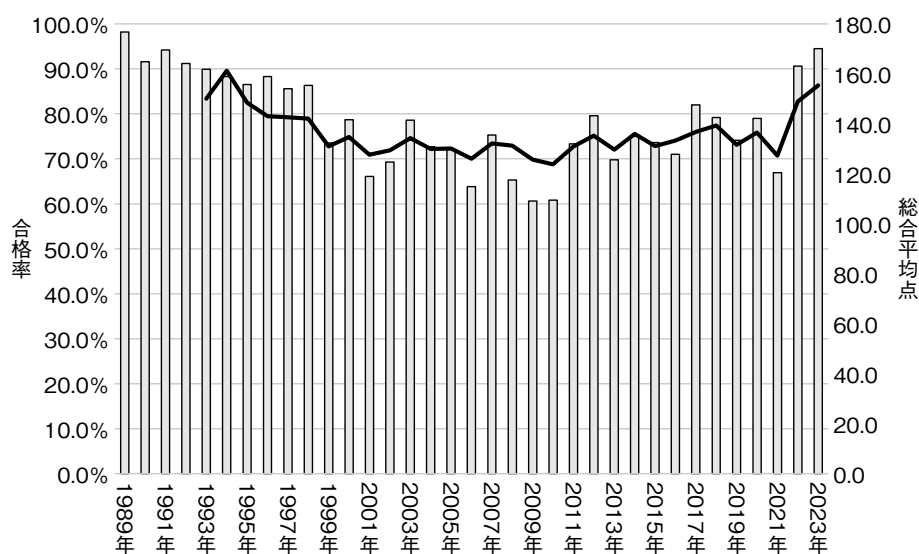


図 1 合格率と総合平均点の推移。
□ 合格率, — 総合平均点

表2 最近3年間の筆記試験成績

	回	最高点	最低点	平均点
一般問題	35回	92.0	35.0	74.7
	34回	92.0	35.0	70.9
	33回	88.0	24.0	61.6
臨床実地問題	35回	96.0	52.0	80.7
	34回	96.0	42.0	78.0
	33回	93.9	32.7	65.7
総合	35回	185.0	89.0	155.4
	34回	188.0	39.0	148.9
	33回	175.8	62.8	127.3

表3 最近3年間の試験
合格者数・不合格者数

年	合格者数	不合格者数
2023	326名	19名
2022	355名	37名
2021	228名	113名

全員の承認を得るという作業を繰り返してくださいました。

7. 良問になると得点は上がった

表2をご覧くださいと明らかですが、平均点は上昇しました。この結果、合格率は表1にあるように、第34回(2022年)で90.6%まで上昇しました。そして、第35回(2023年)も、同じ方針で試験委員会が「専門分野の委員の解説を見れば納得できて、受験者であれば解けると判断した問題」を集めて出題したところ、平均点は74.7点まで上昇しています。この結果、合格率は2021年の66.9%から2023年は94.5%まで上昇しました。

8. 不合格者数は減少した

これは若い眼科医の優秀さの証明であると思うのですが、不合格者が113名から、2年間で19名まで減っています(表3)。この2年間の良問を作る努力の意図は、2026年に始まる、受験資格喪失者の数を可能な限り減らすことでした。試験委員の皆様のご尽力により目標が達成され、感謝の念に堪えません。

9. コロナ禍で途絶えていた、口頭試問の再開

コロナ禍のため対面で話をするのでできない期間が続いていましたが、2023年は3年のブランクを経て、一堂に会した筆記試験と口頭試問を再開しました。口頭試問の面接官は各部屋に2名配置され、受験者との対話において、知識よりも実技、医師として患者さんと対面する姿勢などが評価されます。表3にあるように、2023年の不合格者は筆記試験・口頭試問の両方で総合的に評価して19名です。2021年の不合格者(113名)と比べると、その数は大きく減少しています。それだけに不合格者からのご不満は強いものがあります。筆記試験問題に続いて、来年以降のより良い口頭試問を実施するために、ワーキンググループが立ち上がりました。試験官も、ご自分が専門医試験を受けた世代で100%を占める時代になってきました。受験者の立場になった試験の実施を心掛けていきます。

10. 来年以降の合格率は

2026年以降に受験資格を失う受験者を可能な限り減らすことを意図して良問を増やした結果、得点が上がり合格率90%を達成し、一定の成果を挙げられたと考えています。

その一方で、旧制度でかなり以前に研修を修了しているが、専門医試験に合格していない方が、現在でも500名程度おられます。前述のように、この中で専門医試験をこれまでに一度でも受験された方も2027年に、自動的に専門医試験の受験資格を失います。この流れに乗って、合格を目指してください。先生方の再チャレンジをお待ちしております。**2021年に23.7%だった再受験者の合格率は、筆記試験に良問を揃えた2022年には82.7%まで上昇しています。**2023年の合格率が94.5%と高いことは、専門医試験を行っている意義が損なわれているというご批判もいただいています。来年以降合格率何%を目指すのかが、今後の試験委員会で話し合われる課題になりますが、筆記試験に関しては勉強すれば点数を取れる良問の出題は必ず続きますし、口頭試問もワーキンググループの話し合いにより、受験者が日常診療で身につけた診療技術、患者さんとの対話のスキルを、きちんと評価する専門医試験を確立していきます。十分な準備をしていただければ合格できる専門医試験です。何卒よろしくお願いします。

11. 研修修了の申請をするときに思い出してください

4年の研修が終わって、研修修了の申請をすること、もしくは研修修了の申請をした過去の行為が、5年以内に専門医試験に合格しなければいけないという運命のカウントダウンの始まりであることを記憶してください。また、若い眼科医だけでなく、日本中の教授の先生方、基幹施設の統括責任者の先生方、研修修了の承認をされるときには、一度、その専攻医が5年以内に専門医試験を受験そして合格可能か、今現在、5年以内に合格が必要となるカウントダウンを始めてもよい状況なのかを、もう一度ご確認ください。特に以下の2点が障壁になることが多いようです。



図2 2023年専門医試験終了直後。

前列左から後藤教授，村田試験委員長，小幡試験副委員長，
後列左から日本眼科学会事務局の梅崎氏，茶園氏，北岡氏，圓谷氏。

1) 原著論文をすでにもっているか

原著論文(症例報告を含む)を執筆してアクセプトされることが，受験資格を揃えるうえで最も時間を必要とします。こういう状況が明らかであるときは，専攻医ご本人と，基幹施設の統括責任者とで十分にお話し合いをお願いします。現状では，研修修了の決定をいつ行うかは，基幹施設の統括責任者に全権があります。必要な場合は1年でも2年でも，研修修了を待ってください。ただし，今後あるかもしれない制度の変更にはご注意ください。

2) 留学や出産育児の予定はないか

毎年，専門医試験の直前に，試験日が出産予定日に近いので欠席の可能性がありますとご連絡をいただきます。専門医試験よりもはるかに大切なことですから，無理に受験される必要はまったくありません。ただ，受験者の中には，きちんと欠席届を出せば，5回の受験回数が消費されないことを期待して，ご連絡いただく方もおられます。前述のとおり，受験5回の回数制限ではありません。研修修了日から5年以内の合格が求められています。願書を提出した時点ではなく，専攻医の研修修了を申請した修了日から5年のタイムリミットのカウントダウンは始まります。繰り返

しになりますが，制度が複雑で一概にいけないところがあります。個々の例において何が最善かは，日本眼科学会事務局にお問い合わせください。

12. 最後 に

思い出していただきたいのですが，多くの眼科医にとって，日本眼科学会，日本眼科医会との出会いは専門医試験の願書を作るときであったことは間違いないと思われます。毎年多くの受験者が日本眼科医会の入会予定の段階で出願されますし，私自身は専門医試験の受験時に，滞納していた日本眼科学会の会費をまとめて支払った記憶があります。専門医制度は日本の眼科を支えている，といっても過言ではありません(もちろん，他にも重要な業務は沢山あります)。

今年の試験委員会正副委員長と元試験委員長でご意見番の後藤 浩教授，そして専門医試験を支えてこられた日本眼科学会事務局の茶園氏と，今，全身全霊を傾けて専門医試験を支えてくださっている梅崎氏，北岡氏(圓谷氏はこの写真を撮ってくださったため，別枠での登場となります)が，試験を無事終了してほっとしている笑顔をご覧ください(図2)。そして，来年の専門医試験の準備もすでに始まっています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

村田 敏規

日本眼科学会専門医制度委員会
試験委員会委員長